

我！ 汝 我に與へ給ひたるところの、汝の名に於て、
 我 彼らを まもりゐたり、而して 我 保護せり。
 而も ホロビの子を のぞき、
 彼らの中より 誰も ほろびざりき、
 これ プミの 成就せらればやとてなり。

でも、今や 我 汝の許へ 來りつつあり、
 而して 此らの事を 我 世に於て、語りつつあり。
 これ 彼らも 彼ら自身に於て、みたされたる、
 我ノなる。ヨロコビを 有ちつつあれかしとてなり。
 我！ 我 彼らに 汝の^{一四}コトバを 與へたり。
 而して 世は 彼らを にくめり、
 それ まさしく 我！ 我 世の中より 出でしにあらざるごとく、
 彼らも 世の中より 出でしにあらざればなり。

これ 汝 彼らを 世の中より 取出し給へかしと
 我 請ひつつあるにあらず、
 されど これ、彼らを 悪き者の中より
 汝 まもりたまへかしとてなり。
 まさしく、我！ 我 世の中よりにあらざる如く、
 彼らも 世の中よりにあらざるなり。
 汝 彼らを 眞理に於て、きよめたまへ、
 汝ノなるコトバは 眞理なり。

まさしく 汝 我を 世にへと 遣し給ひしごとく、
 我も また 彼らを 世にへと つかはせり。
 而して 我！ 我自身を 彼らのために、我 きよめつつあり。
 これ 彼ら自身も また 眞理において、

きよめられたる者たれかしてなり、

でも、我 ただ 此らの者に就てのみにあらず、

されど また 彼らのエトバを通じて、

我を信じ込み居る者に就ても こひつつあり。

これ まさしく、父よ！ 汝の 我における、

また 我の 汝におけるごとく、

スベテの者、一なれかしてなり、

これ 彼ら自身 亦 我らに於て、あれかしてなり。

これ 汝！ 汝 我を つかはし給ひしことを

世の 信ぜよかしてなり。

汝^三 我に與へ給ひたるところのサカエを

我！ 我も また 彼らに あたへたり。

これ まさしく、我ら 一なるがごとく、

彼らも 一なれかしてなり。

我^三！ 我 彼らに於て、又 汝！ 汝 我に於て！

これ 彼ら 一にへと 完うされたる者たれかしてなり。

これ 汝！ 汝 我を つかはし給ひしことと、

かつ まさしく 汝 我を愛したまひしごとく、

汝 また 彼らをも 愛したまひしこととを

これ 世の 知りつつあれよかしてなり。

父よ！ 汝 我に與へたまひたるところの物！

願はくは、これ 何處にても、我が 在る處に、

カノ者らも 亦 我と借に 在らまほしきものを！

これ 汝 我に あたへ給ひたるところの、

我ノなるサカエを 彼ら 観ぬきつつあれかしてなり。

それ 汝 我を 世の破壊以前より、愛したまひければなり。

義なる父よ！

而も世は汝を知らざりき。

でも、我！ 我は汝を知れり。

また此らの者も、それ汝我をつかはし給ひしことを知れり。

而して我彼らに汝の名を知りぬかしめり。

而も我知りぬかしめつつあらん。

これ汝我を愛したまひしところの愛

彼らにおいて、あれかしとてなり。

我もまた彼らにおいて、……………。

第十八章

二九 彌崇 捕へられ給ふ（二八の一—二七）

彌崇^一 此らの事を言ひ給ひて、ソの弟子に伴ひ、ケヅロンの磧の彼方、園の在りたる處へ出で來り、彼御自身ソの處へ入り來りたまへり。而して彼の弟子らも、^二で、彼を付し居る者なるユダも、亦場處を識りたり。それ彌崇^三ソの弟子と偕に、しばしば其處へつどはせ給ひければなり。さるほどに、ユダは兵隊と、祭司長やパリサイ人の中よりの下役とを得て、松明や提灯や武器をもち、其處へ來りつつあり。さるほどに、彌崇^四彼の上に来りつつあるところの凡テの事を識りて、出で來たまへり。而して彼らに言ひたまふ誰を汝らあさりつつあるか？

彼ら^五 彼に答へられき

ナザレ者なる彌崇を!

彌崇 彼らに言ひたまふ

我なり!

で、彼を付しつある者なるユダも 亦 彼らと偕に 立臨みたり。
さるほどに、「我なり!」と 彼 彼らに言ひ給へるや 彼ら 後の
物へと たじろぎ、而して 地ベタに 倒れけり。

さるほどに、彼 ふたたび 彼らを なじり給へり

誰を 汝ら あさり居るか?

で、彼ら 言へり

ナザレ者なる彌崇を。

彌崇 答へられたまへり、

それ 「我なり」と 我 汝らに言へり

さるほどに、もし 汝ら 我を あさりつつあらば、

汝ら 此らの者を しりぞきつつあらしめよ。

これ、^九「汝 我に與へ給ひたるところの者をば、彼らの中より 誰を
も、我 ほろぼさざりき」と、彼 言ひ給ひしところの。コトバの 成
就せらればやとてなり。

さるほどに、ツルギを持てるシモン ペツロ、ソレを抜き、而して

祭司長の奴隸を撃ち、而も 彼の右ノなる小耳を切放てり。で、奴隸
には 名が マルコスにて ありたり。^{二〇}さるほどに、彌崇 ペツロに
言ひ給へり

汝 ツルギを サヤへ ぶちこめ。

父 我に あたへ給ひたるところのサカヅキ!

我 ソレを のまざるべけんや?

^{二一}さるほどに、兵隊や、千人長や、猶太人の下役ら、彌崇を捕へ、而し

て彼を縛れり。かくて彼らまづ、アンナスの許へつれ往けり。そは、彼はカノ年の祭司長にてありたるところのカヤバのシットにてありたればなり。で、「それ、民の爲に一人一人死に去るは益なり」と、猶太人に勧めし者はカヤバにてありたり。

で、シモンペツロ彌崇に附従ひ居たり。また他の弟子も。でも、カノ弟子は祭司長に知らるる者にてありたり。彼も亦祭司長の殿庭へと、彌崇に伴ひ、入り來れり。でも、ペツロは、戸に向ひ、ソトに立臨みたり。さるほどに、祭司長に知らるる者にてありたるところの、他の者なる弟子、出で來れり。而して彼戸守女に言へり、而してペツロを連れ込めり。さるほどに、戸守女なる奴婢ベツロに言ふ

まあ 汝！ 汝も 亦 此人の弟子の中の者なるか？

カノ者 言ふ

我は あらず！

で、寒くありたれば、奴隸や下役ら、とくはや煖を熾して、立臨みたり、而して煖り居たり。で、ペツロも亦立臨みたるまま、而も煖りながら、彼らと偕にありたり。

さるほどに、祭司長彼の弟子につき、又、彼の教へにつき、彌崇へ問へり。彌崇 彼に答へられ給へり

我！ 我は 大膽に、世にかたりたり。

我！ 我は つねに 猶太人ら凡テの者が集まり來りつつある處の會堂においても、

また 宮においても 教へぬ。

而も 祕密において、何をも 語らざりき。

何ぞ 汝 我へ 問ひつつあるか？

何を 我 彼らに語りしか、聞きたる者へ 汝 問へ。

視よ！ 此らの者は、我が言ひしところの事を識れり。

で、^{三三}此らの事を、彼言ひ給ひしに、下役の一人、立添ひ居たる者、^{三三}彌崇に、一掌を與へぬ、言ひしには

かやうに、汝、^{三三}祭司長に答ふるか？

^{三三}彌崇 彼に答へられたまへり

もし、我、悪しく、かたりしならば

悪しき事につき、汝、立證せよ。

でも、もし、良くば、何ぞ、汝、我を、なぐるか？

^{三四}さるほどに、アンナス、縛られたる彼を、祭司長なるカヤバの許へつかはせり。

^{三五}で、シモン、ペツロも、立ちたるまま、かつ、^{三五}煖りながら、ありたり。
^{三五}さるほどに、彼ら、彼に言へり

まあ、汝！ 汝も、亦、彼の弟子の中の者なるか？

カノ者、否めり、而して、言へり

我は、あらず！

^{三六}ペツロが、耳を切放ちしところの者の親族なる者、祭司長の奴隸の中の一人、言ふ

我！ 我、彼と偕に、園における汝を見しに非ずや？

^{三七}さる程に、ペツロ、再度、否めり、而して、忽ち、雞、鳴けり。

三〇 ビラトの前の彌崇（二八の二八—四〇）

^{三八}さるほどに、カヤバより、役所へと、彼ら、彌崇を連れ往きつつあり。で、夜明にてありたり。而も、彼ら自身は、役所へと入り來らざりき。これ、彼ら、けがされまじく、されど、スギヨシを食はばやとてなり。^{三九}さるほどに、ピラト、ソトへ、彼らの許へ出で來れり。而して、彼、宣ぶ

汝ら 此人に逆ひ、いかなる訴を齎しつつありや？
彼ら 答へられ、而して 彼に言へり

もし 此者 ワルモノならざりしならば、

それ 我ら 彼を 汝に付きざりしものを！

さるほどに、ピラト 彼らに言へり

汝ら！ 汝ら 彼を 取れ、

かつ 汝らのオキテに應じて、

汝ら 彼を さばけ。

猶太人ら 彼に言へり

我らには 誰をも 殺すまじきことなり。

これ いかなる死にて、彼 まさに 死に去りかけ居たるかを諷し

て、言ひ給ひたるところの、彌崇の。コトバの成就せらればやとてなり。

さるほどに、ピラト ふたたび 役所へ入り來れり。而して 彌崇を

呼ばはり、かつ 彼に言へり

汝！ 汝は 猶太人の王なるか？

彌崇 答へられ給へり

汝自身より、汝！ 汝 此事を言ひつつありや？

或は 他の者、我につき、汝に言ひしか？

ピラト 答へられき

まあ 我！ 我 豈 猶太人ならんや？

汝ノなる國人や祭司長ら 汝を 我に付せり。

何を 汝 爲ししや？

彌崇 答へられたまへり

我ノなる王國は 此世の中ノに非ざるなり、

もし 我ノなる王國が 此世の中ノなりしならば、

これ 猶太人らに 我の わたされまじとて、

それ 我ノなる下役ら あがき居たるものを。

でも、今、我ノなる王国は 此處よりに非ざるなり。

二一〇

さるほどに、ピラト 彼に言へり

さるにても、汝！ 汝は 王ならずや？

彌崇 答へられたまへり

汝！ 汝 言ひつつあり、

それ 我！ 我は 王なればなり。

我！ 我は コレにこそ 生れたり。

而も コレにこそ、我は 世にへと 來りたり。

これ 我 眞理に 立證せばやとてなり。

眞理より出で居る者は、皆 我が聲を聞きつつあり。

ピラト 彼に言ふ

何なりや 眞理とは？

而して 此事を言ひて、彼 ふたたび 猶太人の許へ出で來れり。而して 彼 彼らに言ふ

我！ 我 彼に於て、何も トガを 見出さず。

でも、これ スギヨシに於て、一(人)を 我 汝らに

赦さばやとのナラハシ 汝らに あり。

さるほどに、猶太人の王を、我 汝らに

ゆるせよかし と、汝ら のぞみつつありや？

さるほどに、彼ら、再度、をたけびぬ、言へるには

此者をならず、されど バラバを！

でも、バラバは 強盜にてありたり。

二一一

第十九章

三一 死刑の宣告（一九の一—一六上）

さるほどに、其時、ピラト 彌崇を取れり。而して 鞭うてり。又、兵卒ら 茨もて、冠を編出して、彼の頭に載せ、且、紫の上衣を 彼へ纏へり。而して 彼ら 彼の許へ來りはじめ、而して 言ひるたり
バンザイ！ 猶太人の王！
而も 彼ら 幾掌打をも 彼に與へるたり。かくて ピラト ふたたび、ソトへ出で來れり。而して 彼らに言ふ
視よ！ 我 ソトへ 彼を 汝らに連れ來る。
これ 彼に於て、我 何一つ トガを 見出さざること を 汝ら 知れよかしとてなり。

さるほどに、茨の冠と紫の上衣とを著て、彌崇 ソトへ 出で來りたまへり。而して 彼 彼らに言ふ

視よ！ 人！

さるほどに、祭司長や下役ら 彼を見し時、彼ら をたけべり、言へるには

汝 はりつけよ！ 汝 はりつけよ！

ピラト 彼らに言ふ

汝ら！ 汝ら 彼を取れ、而して はりつけよ！

そは 我！ 我 彼に於て、科を見出さざればなり。

猶太人ら 彼に答へられき

我ら！ 我ら オキテを もちつつあり

而も オキテに應じ、彼は 死に去るべき苦なり。

それ 彼は 彼自身を 神の子と 爲しければなり。

さるほどに、ピラト このコトバを聞きし時、ますます 彼 おそれ
させられり。

かくて 彼 再度、役所へと入り來れり。而して 彼 彌崇に言ふ

汝 何處よりなるか？ 汝！

でも、彌崇 答を 彼に與へ給はざりき。さるほどに、ピラト 彼に
言ふ

我に 汝 かたらざるか？

それ 我 汝を釋す權を もち、

また 汝を はりつける權をも

もてることを 汝 識らざるか？

彌崇 彼に答へられ給へり

上より 汝に與へられたるモノならざりしならば、

汝 我に逆ひて 一だも 權を有ちるたるにあらず。

この故に、我を 汝に付しし者は

ヨリ大なるツミを もつ。

是よりして、ピラト 彼を釋さんと あさり始めたり。でも、猶太人
ら 叫びるたり、言へるには

もしそれ 汝 此者を ゆるさば、

汝は カイサルの友にあらざるなり。

彼自身を 王と爲しつつある者は

皆 カイサルに いさかひつつあり。

さるほどに、此らのコトバを聞きしピラト 彌崇を ソトへ、シキイ
シへ、でも、希伯來語にて、「ガバサ」と謂はるる場處へと、連れ出
せり。而して 彼 高座の上に坐れり。

で、スギコシのソナへ(日)にて ありたり。時は 第六頃にてあり
たり。而して 彼 猶太人に 言ふ

視よ！ 汝らの王！

^{一五}さるほどに、カノ者ら をたけべり

汝 取除け！ 汝 取除け！

汝 彼を はりつけよ！

ピラト 彼らに言ふ

我 汝らの王を はりつけつつあらんや？

祭司長ら 答へられき

カイサルのホカ 我らは 王を もちつつあらず。

^{一六上}さるほどに、其時、彼 彼を 彼らに付せり、これ 彼の はりつけ
らればやとてなり。

三二 十字架上の彌崇（一九の一六下—三七）

^{一六下}さるほどに、彼ら 彌崇を受取れり。而も 彼御自身に 十字架を擔ぎ

給ひて、希伯來語に「ゴルゴサ」と謂はるる處、「サレカウベ」と謂は

るる場處へと、出で來りたまへり。ソの處に、彼ら 彼を はりつけ

き。而して 彼と偕に、他の者をも、アチラとコチラとに、二（人）。

で、中央に、彌崇を。

^{一九}で、ピラト また 稱號を書き、而して 十字架の上におけり。で、

書かれたるモノは

ナザレ者彌崇、猶太人の王！

にて、ありたり。^{三〇}さるほどに、彌崇の はりつけられし處の場處は、

町の近クにてありたりしかば、猶太人の多クの者は、この稱號を讀め

り。而も、希伯來語、羅馬語、希臘語にて、書かれたるモノにてあり

たり。^{三一}さるほどに、猶太人の祭司長ら ピラトに言ひるたり

汝 書く勿れ、「猶太人の王」。されど

「我は 猶太人の王なり」と

カノ者は 言へりと ……………。

^{三二}ピラト 答へられき

我 書きたるところのユトは 我 書きたり。

二一八

さるほどに、兵卒ら 彌崇を はりつけし時、彼ら 彼の上衣を、而も 各卒に（一）部づつとして、四部と爲し、亦、下衣をも取れり。でも、下衣は 上より全部 織り通さるる、縫目なきモノにてありたり。さるほどに、彼ら 相互に向ひて、言へり

我ら ソレを裂くまじ、されど 誰ノならんか、我らをして、ソレにつき、クジびかしめよ。

これ、「我が上衣を 彼ら自身に分かてり。而も 我が著物の上に、彼ら クジを投ぜり」と 言へるところのフミの 成就せらればやとてなり。さるほどに、兵卒ら、げに 此らの事を 爲せり。

で、彌崇の十字架に添ひ、彼の母や、彼の母の姉妹や、クロバのなるマリヤや、マグダラ女なるマリヤなど、とく立臨みたり。さるほどに、

彌崇 母と、彼が愛し居たまひたるところの、立添ひたる弟子とを見て、母に言ひたまふ

女よ！ 視よ、汝の子！

ソレより、彼 弟子に言ひたまふ

視よ！ 汝の母！

而して カノ時より、弟子は 己がモノへと、彼女を引取れり。此事の後、彌崇 スベテの事、既に完うせられたることを識りたまひて、フミの 完うせられめやとて、彼 言ひたまふ

我 かわきつつあり。

酔の満てるウツハ おかれありたり。さるほどに、彼ら 酔の満てる海綿を ヒソブに捲附けて、彼の口に當てがへり。さるほどに、彌崇 酔を受けし時、言ひ給へり

ソレ 完うせられたり！

而して 彼 頭を垂れて、靈を わたしたまへり。

二一九

さるほどに、猶太人ら、ソナへ（日）にてありたりしかば、サバス（モ
 はカノサバスの日は大なるモノなりければなり）に於て、カラダが十字架
 の上に、止まらざらめとて、彼らの脛が打碎かれ、而して、取除かれ
 ばやと、ピラトへ請へり。さるほどに、兵卒ら、來れり、而して、げ
 にや、彼に伴ひ、はりつけられしところの第一の者と、他の者との脛
 を打碎けり。でも、彼ら、彌崇の上に来りて、すでに死にたる彼を見
 しかば、彼ら、彼の脛を打碎かざりき。されど、兵卒の一人（人）ヤリ
 にて、彼の脇を刺せり。而して、ただちに、血と水と、出で來れり。
 而して、視たる者、立證したり。而も、彼の立證は、真正なるもの
 なり。而して、カノ者は、真正の事を言ひつつありとのコトを識れ
 り。これ、汝ら！ 汝らも、亦、信ぜよかしとてなり。そは、プミの
 成就せらればやとて、此らの事、おこりければなり。
 彼の骨は、くじかれつつあらざらん。
 また、ふたたび、別のフミは、言ふ

彼ら、突刺ししところの者を、觀入りつつあらん。

三三 彌崇の埋葬（一九の三八—四二）

で、此らの事の後、アリマサヤよりの者なる。ヨセフ、彌崇の弟子なる
 者、でも、猶太人の恐怖の故に、隠されたる者、彌崇のカラダを取除
 かばやとて、ピラトへ請へり。而して、ピラト、差許せり。さるほど
 に、彼、來れり。而して、彼のカラダを取除けり。
 で、最初、夜、彼の許へ來りし者なるニコデモも、亦、モツヤク 没藥とヂンカウ 沈香と
 の混和物、百リトルほど、携へて、來れり。さるほどに、彼ら、彌崇
 のカラダを取れり。而して、葬リ仕度すべき、猶太人にあるナラハシ
 通り、まさしく、彼ら、香料と共に、布にて、ソレを巻けり。で、四二
 はりつけられし處の場處において、園、而も、園において、なほ未だ
 ソレにおいて、誰も、おかれざりしところの新しきハカありたり。さ
 るほどに、ハカ、近クありたれば、猶太人のソナへ（日）の故に、彼

ら 其處に 彌崇を おけり。

三三二

第二十章

三四 彌崇の復活(二〇の一—三二)

で、サバスの一(日)に、マグダラ女なるマリヤ、朝マダキ、なほ暗きに、ハカへと来る。而してハカより取出されたる石をながむ、さるほどに、彼女走り、且、シモンペツロの許と、彌崇の愛慕し居たまひたるところの、他の弟子の許とへ來り、而して彼らに言ふ

彼らハカより、^五玉を 取出せり、
而も 我ら 識らず、何處に
彼ら 彼を おきしかを!

さるほどに、ペツロも、他の弟子も 亦 出で來れり。而して 彼らハカへと來はじめたり。で、彼ら二(人)ともども 走り始めたり。而も 他の弟子は ペツロよりも、速に走り越せり。而して、最初にハカへと 來れり。而して 彼 屈みて、横たはれる布をながめつつあり。さりながら、彼 は入らざりき。さるほどに、シモンペツロも 亦 彼に附従ひて、來る、而して ハカへと入り來れり。而も 彼 視ぬきつつあり、横たはれる布をも、また 彼の頭の上に、ありたるところの手拭をば、布と共に横たへられず、されど、はなれて、一處へ疊みおかれたるノをも。さるほどに、其時、ハカへと、最初に、來りし者なる他の弟子も、亦 入り來れり。而して 彼 視、かつ 信ぜり。そは 彼ら なほ未だ「彼 死ねる者の中より、立上らざるべからず」とのフミを よく識りたらざればなり。さるほどに、弟子ら ふたたび 彼ら自身の許へ往けり。

三三三

で、マリヤ ソトで、泣きながら、ハカに向ひて、立臨みたり。さる
ほどに、彼女 泣き居たりしかど、バカへと屈み込めり。而して 彼
女 其處に 彌崇のカラダの横たはりたる處に、一人は頭に向ひ、
また 一人は 足に向ひて坐れる、白(衣)における二使者を視ぬきつ
つあり。而して カノ者ら 彼女に言ふ
女よ！ 何ぞ 汝 泣きつつありや？
彼女 彼らに言ふ

それ 彼ら 我が主を 取去れり、
而も 何處に、彼を 彼ら
おきしかを 我 識らざればなり。

此らの事を言ひし彼女、後のモノへと振向けり。而して 立臨みたま
ひたる彌崇を視ぬきつつあり、而も 彌崇なりとのことを 彼女 よ
く識りたらず、彌崇 彼女に言ひたまふ

女よ！ 何ぞ 汝 泣きつつありや？

誰を 汝 あさりつつありや？

園丁なりと思ひて、カノ女 彼に言ふ

主よ！ もし 汝！ 汝 彼を はこびしならば、

汝 何處に、彼を おきしかを 我に 言へ。

我も また 彼を 取去りつつあらん。

彌崇 彼女に言ひたまふ

マリヤ！

カノ女 振向きて、彼に 希伯來語にて、言ふ

ラブウニ！ 「先生！」と 謂はるること」

彌崇 彼女に言ひたまふ

汝 我に さはるなかれ、

そは 我 なほ未だ 父の許へ昇りたらざればなり。

で、汝 我が兄弟の許へ すすみつつあれ。

而して 汝 彼らに言へ

我が父、かつ 汝らの父、また

我が神、かつ 汝らの神の許へ

我 のぼりつつあり。

^{一八} マグダラ女なるマリヤ、「我 主を見たり、かつ 此らの事を、彼女に言ひたまへり」と 弟子らに告げながら、來りつつあり。

^{一九} さるほどに、サバスの一なるカノ日に、夕なれば、而も 猶太人の恐怖の故に、其處に、弟子らが居りたる處の戸は、とぎされたるまま、^彌 來りたまへり。而して 中央へ立入りたまへり。かつ 彼らに言ひたまふ

平和 汝らに！

^{二〇} 而も 此事を言ひて、彼 手と脇とを 彼らに示したまへり。さるほどに、^{二一} 主を見し弟子ら よろこべり。さるほどに、^彌 來りたまへり。ふたたび

彼らに言ひたまへり

平和 汝らに！

まさしく、父 我を つかはし給ひたる如く

我！ 我も また 汝らを おくりつつあり。

^{二三} かつ 此事を言ひて、息吹き込みたまへり。而して 彼らに言ひたまふ

汝ら 聖靈を うけよ。

^{二四} それ 汝ら 誰でもものツミを赦さば、

其らは 彼らに ゆるされつつあり。

それ 汝ら 誰でもノを 握りつめ居らば、

其らは …… にぎりつめられたり。

^{二五} ても 十二の者の中の一(人)、「フタゴ」と謂はるる者なるトマス、^彌 來りたまひし時、彼らと偕に あらざりき。さるほどに、他の弟

子ら 彼に言ひ居たり

我ら 至を 視たり！

でも、彼 彼らに言へり

もしそれ 我 彼の手に於て、クギのアトを見、

かつ 我がユビを クギのアトへ 突込み、

また 我が手を 彼の脇へ 突込むに非ざれば

我は 決して 信じつつあらざらん。

かくて 八日の後、ふたたび、彼の弟子ら、而も トマスも 彼らと
 偕に、内に ありたり。戸は とざされたるままに、彌樂 來りたま
 ひ、かつ 中央へ立入り、而して 言ひたまへり

平和 汝らに！

夫より、彼 トマスに言ひたまふ

汝のユビを 此處へ もち來れ。

而して 汝 我が手を 見よ。

また 汝の手を もち來れ。

而して 我が脇へ 突込め。

而も 汝 不信者たる勿れ。

されど 信者！

トマス 答へられ、而して 彼に言へり

我が至！ かつ 我が神！

彌樂 彼に言ひたまふ

それ 汝 我を視たればこそ、汝 信じたれ、

見ざりし者にて、而も 信ぜし者は 幸となる者！

さるほどに、げに、この小巻物において、書かれたるモノに非ざると
 ころの多くの他のシルシをも、また 彌樂は 弟子らの前にて、爲し
 たまへり。で、此らの事は 書かれたり

それ、「彌崇は神の子なる貴徳なり」とのこゝを
 これ 汝ら 信ぜよかしとてなり。
 而も これ 信じ居る者は 彼の名に於て
 イノチを有ちつつあれかしとてなり。

第二十一章

三五 湖畔における御顯現(二二の一—二五)

此らの事の後、彌崇 ふたたび、チベリヤの海の上(邊)にて、御自身
 を 弟子らに顯したまへり。で、斯の如くに、あらはし給へり。シモ
 ン ペツロと、「フタゴ」と謂はるる者なるトマスと、ガリラヤのカナ
 よりの者なるナサナエルと、ゼベダイのなる者らと、彼の弟子の中の
 他の二(人)と、ともども ありたり。シモン ペツロ 彼らに言ふ

我 スナドリに もどりつつあり。

彼ら 彼に言ふ

我ら! 我らも 亦 汝に伴ひ、來りつつあり。

彼ら 出で來れり。而して 舟へ乗込めり。而も カノ夜において、

彼ら 何をも捕へざりき。で、すでに、夜明クと成りければ、彌崇

イソへと立臨みたまへり。さりながら、弟子らは、彌崇なりとのこと

を よく識りたらざれり。さるほどに、彌崇 彼らに言ひたまふ

小童よ! 汝ら 何か タベモノを有ち居るや?

彼ら 彼に答へられき

なし!

で、彼 彼らに言ひたまへり

汝ら アミを 舟の右リ部へ 投込め。

而して 汝ら 見出しつつあらん。

さるほどに、彼ら 投ぜり。而も 魚の夥シキより、彼ら ソレを、

もはや、曳上ぐるに堪へざりき。

さるほどに、彌崇 愛しむ給ひたるころの、カノ弟子、ベツロに言ふ

「主なり！」

さるほどに、それ「主なり！」と聞きしシモン ベツロ 上袍を纏へり。「そは 彼 ハダカにて ありたればなり」。而して 彼自身を 海へ投込めり。で、他の弟子ら、魚のアミを曳きすりながら、小舟にて、來れり。「そは 彼ら 陸より遠からず、されど 二百キユピトほど、はなれ居たればなり」さるほどに、彼ら 陸へと上れるや、熾れる燠と、載せらるる小肴と、パンとを ながめつつあり。彌崇 彼らに言ひたまふ
汝ら 今 捕へしところの小肴よりノを 持來れ。
さるほどに、シモン ベツロ 上り、而して 大なる魚百五十三の 滿つるアミを、陸へと曳上げり。而も かほど多かりしに、アミは

裂けざりき。

彌崇 彼らに言ひたまふ

「いざ來れ！ 汝ら アサゲせよ！」

で、彼ら「主なり」と識りて、弟子の誰も「汝！ 汝は 誰なるか？」と、あへて 彼を ほじくり居たらざりき。

彌崇 來りたまひ、而して、パンを取り、かつ 彼らに與へたまふ。

また ひとしく 小肴をも。

ユレは、すでに、死ねる者の中より起され給ひし彌崇が 弟子らに あらはされ給ひし第三。

さるほどに、彼ら アサゲせし時、彌崇 シモン ベツロに言ひたまふ

「ヨナのシモンよ！」

此らの者よりも多く、汝 我を 愛しつつありや？

彼 彼に言ふ

はい！ 主よ！ 汝！ 汝 識りたまふ。

それ 我 汝を 愛慕しつつあることを。

彼 彼に言ひたまふ

汝 我が小羊を飼ひつつあれ、

彼^六 ふたたび、第二回、彼に言ひたまふ

ヨナのシモンよ！

汝 我を 愛しつつありや？

彼 彼に言ふ

はい！ 主よ！ 汝！ 汝 識りたまふ

それ 我 汝を 愛慕しつつあることを。

彼 彼に言ひたまふ

汝 我が羊を牧しつつあれ。

彼^七 第三回、彼に言ひたまふ

ヨナのシモンよ！

汝 我を 愛慕しつつありや？

「汝 我を 愛慕しつつありや？」と、彼 第三回 彼に言ひたまひ
しかば、ペツロ かなしまされぬ。而して 彼 彼に言へり

主よ！ 凡テの事を 汝！ 汝 識りたまふ

それ 我 汝を 愛慕しつつあることを。

汝！ 汝 知りつつありたまふ。

彌崇 彼に言ひたまふ

汝 我が小羊を飼ひつつあれ。

まこと^八に まこと^八に 我 汝に言ふ

汝 若くありたる時は 汝自身を帶し

且、何處にても、汝 欲しむたる處を 歩み居たり。

でも、 汝 老いたらん時には、

汝の手を 汝 伸べつつあらん、

而して 他の者 汝を 帶しつつあらん、

而も 何處にても、汝の欲せざる處へ、

彼 はこびつつあらん。

^{一五}で、いかなる死にて、彼 神を榮やかしつつあらんかを諷して、彼

此事を言ひたまへり。かつ この事を言ひて、彼 彼に言ひたまふ

汝 我に つきしたがひつつあれ。

^{二〇}ベツロ 振向きて、彌崇が 愛し居たまひたるころの、而も 晚餐

において、彼のムネへ凭れかかり、かつ「^三主よ 汝を付しつつある者

は 誰なりや？」と言ひしところの者なる、附従ひつつある弟子を眺

めつつあり。^{二二}さるほどに、ベツロ 此者を見て、彌崇に言ふ

^三主よ！ で、此者は いかにかに？

^三彌崇 彼に言ひたまふ

もしそれ 我が来るまで、彼の ながらふるを、

我 欲するとも、汝に對して、それ 何ぞ？

汝！ 汝 我に つきしたがひつつあれ。

^{三三}さるほどに、それ カノ弟子は 死に去らずとの此言 兄弟らへと出

で來れり。でも、彌崇は「彼 死に去らず」とにあらす、されど、「も

しそれ、我が来るまで、彼の ながらふるを 我 欲するとも、汝に

對して、それ 何ぞ？」と 彼に言ひたまへり。

^{三四}此者は 此らの事につき、立證しつつあるところの者、又 此らの事
を書きしところの弟子なり。而も 我らは 彼の立證が 眞正なり
とのことを識る。

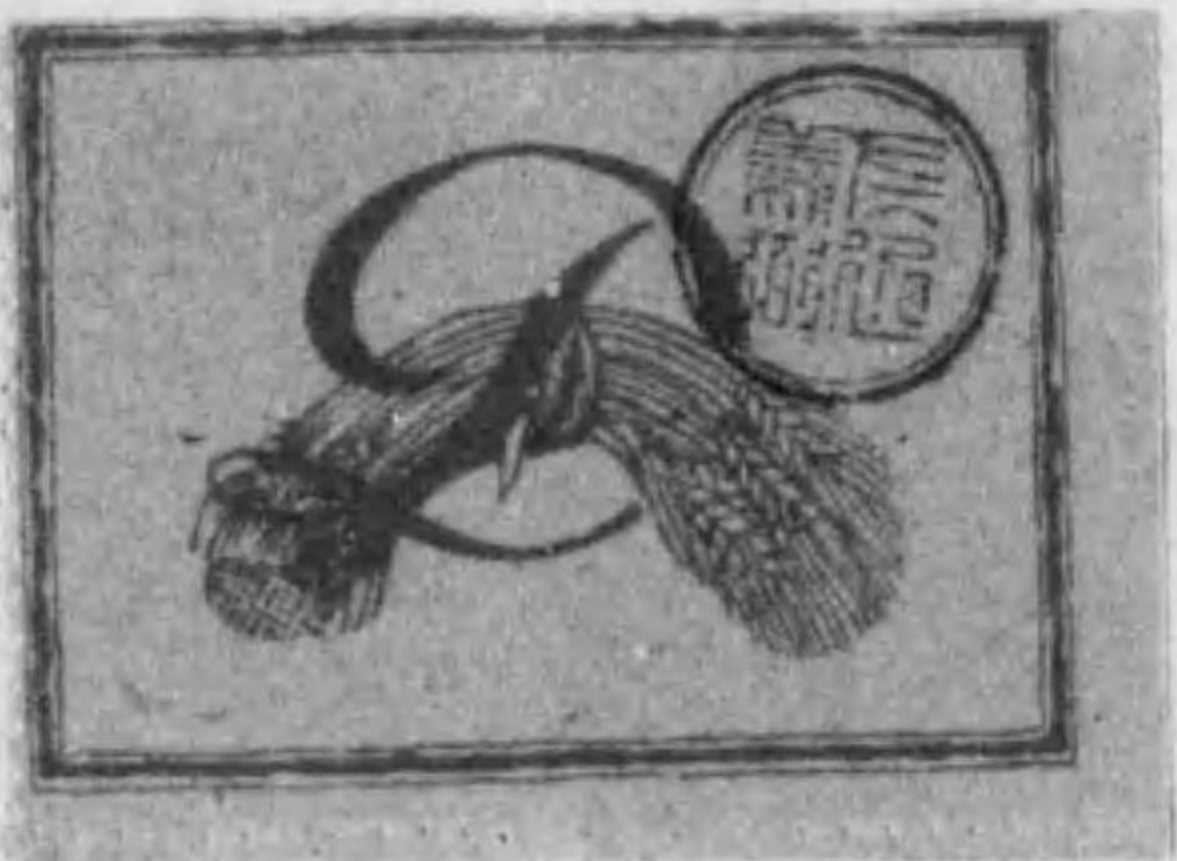
で、而も 彌崇の爲し給ひし所の他の多クの事あり。もしそれ、何事、
にても、一一、書かれなば、我 案するに、書かるる小卷をば、世界
其者も容れまじ。

ヨハネの
つたへし

福音書

をはり

しへたつのネハヨ
書音福



昭和十七年一月十日印刷
昭和十七年一月十五日第一刷二千部發行

◎定價一圓八十錢

外地定價一圓九十八錢
但、土地の事情に依り
尙増することあるべし。

會員登録番號
一一六五〇八

譯者 左近義弼
サ コシ ヨシ アケ

刊行者 長谷川巳之吉
東京市麹町區三番町一

刊行所 第一書房
東京市麹町區三番町一
振替東京 六四二二三
電話九段 一四一四五
三三四四

發兌 第一書房
東京市銀座數寄屋橋
電話京橋五九八七

配給元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二丁目九番地

* 落丁・亂丁の際は直接本社にてお取替へ致します。

印刷所 東京市小石川區西江戸川町 富士印刷株式會社

文藝博士 得能	文著	哲學講話	菊判 三一〇頁 定價 一圓五十錢	吉岡修一郎譯	ベルグソン著 思想と動くもの	四六判 三五六頁 定價 一圓八十錢
得能	文著	哲學概論	菊判 一六八頁 定價 一圓五十錢	吉岡修一郎譯	ベルグソン著 道德と宗教	四六判 四九〇頁 定價 一圓八十錢
大江精志郎著	人生觀學	人生觀學	四六判 二五五頁 定價 一圓五十錢	吉岡修一郎著	ベルグソンと 科學精神	四六判 三三六頁 定價 一圓五十錢
大江精志郎著	哲學的世界觀	哲學的世界觀	四六判 三九一頁 定價 一圓八十錢	井上忻治譯	ヴインデルバント著 一般哲學史	第一卷 價二圓
濱田與助著	人間の問題	人間の問題	四六判 二四九頁 定價 一圓二十錢	井上忻治譯	希臘・羅馬哲學、中世哲學 一般哲學史	第二卷 價二圓
大島 豐著	自然科學より哲學へ	自然科學より哲學へ	菊判 一八五頁 定價 一圓五十錢	井上忻治譯	文藝復興期の哲學 一般哲學史	第三卷 價二圓
大島 豐著	現代哲學の發達	現代哲學の發達	菊判 四〇四頁 定價 二圓	井上忻治譯	獨逸哲學、十九世紀の哲學 一般哲學史	第四卷 價二圓
大島 豐譯	宇宙に於ける 人間の地位	宇宙に於ける 人間の地位	四六判 一六九頁 定價 一圓二十錢	村上寬逸譯	コーヘン著 純粹認識の論理學	品 切
大島 豐譯	人 生 論	人 生 論	四六判 二七六頁 定價 一圓三十錢	村上寬逸譯	コーヘン著 純粹意志の倫理學	品 切
小林太市郎譯	精 神 力	精 神 力	四六判 二五五頁 定價 一圓八十錢	村上寬逸譯	コーヘン著 純粹感情の美學	品 切

終

